

COMeVA? マノーロ、フリークライミングの魔術師

「研究と綿密な計画を通じて登攀を体験し、夢見て、最後に勇気ある登攀をすること。この映画はフリークライミング（自由登攀）は単なるスポーツにとどまらず、独創性あふれる芸術であることを証明するものである。マノーロは、ドロミーティに深くかかわる活動の中で、自分の能力を自己の限界を超えるところまで推し進める」。このような理由で、ダヴェデ・カッラーリと「マノーロ」ことマルリツィオ・ザノツラの手になる映画『Verticalmente Démodé (仮題 垂直に流行遅れ)』に対して、2012年トレント映画祭の審査委員会は登山関係の最優秀映画の賞である「イタリア登山クラブ 金のリンドウ賞」を授けた。



ラインホルト・メスナーには「8000メートル級の王者」のタイトルがふさわしいとしたら、マノーロは「フリークライミングの世界レベルの発明者」というタイトルを持つ権利があるだろう。マノーロの正当派でない方法については、山岳界で分析・研究され、模倣され、時には批判されてきた。それについては、イレネ・ビニャルディ、ローリー・マルキ、チェザレ・チエロ、フランチェスカ・シローニなど、著名ジャーナリストたちが書いている。

マノーロは、ドロミーティの山々の麓にあるヴェネト州のフェルトレという町で生まれた、さりげない人柄を持つ人物だ。飾り気がなく、まじめで、内気な、「真の山の人間」だといえる。登山を始めたのは、17歳の頃。「普段とはちがうことをしてみたかったのです。工場での仕事には満足できませんでした。家のすぐそばにあった山々に強くひかれるようになって、登り始めたのです」とマノーロは語る。

マノーロが自分のことや自分のキャリアについて語るときは自然で、強調するような口調になることはない。距離を置いて語っており、いつもある種の「冷静さ」を持って体験してきた感じさえ受ける。

彼は、自分がこの特殊な種目に向いてい

ると理解するまで、多くの時間をかけなかった。時間とともに、マノーロは経験を積んでいき、新しい登攀をするたびに高跳びのバーを上げて行くように難度を上げ、真の神話となる存在になった。果てには、有名な時計ブランドが広告キャンペーンに彼を起用し、大成功をあげた。

裸の上半身、パーミューダーパンツ、そして軽いシューズ。「黄金時代」のマノーロは、他に何も使わずに、これだけでクライミングをしていた。無用心、危険を軽視し過ぎている？そうかもしれない。マノーロは隠さない。「自分が幸運を得た者だということはよく承知しています。自分がどんな危険を冒しているかはよく知っていました。でも、あれが私の人生だったのです。探しに出かけていたのは自分の限界。見つけることができたと思います」。

彼のこの発言にうそはない。彼は、世界山岳連盟のグレード分類でVIII、IX、X、そしておそらくXIの登攀をした、世界で最初の「クライマー」のひとりなのだ。彼は、しばしば「フリー・ソロ」の登攀を成し遂げた。これは、ロープや他の安全器具なしで登攀するというもので、マノーロは崖の登攀の10級に到達した。マノーロは、垂直以上の傾きを持つ壁よりも、s垂直の岩壁をいつも好んできた。さらに、彼は重い山靴よりも軽い靴を最初に使用した人として知られる。事実上、現代のロッククライミングを発明したといえるだろう。

マノーロは、アルプスおよびドロミーティにある、ヨーロッパの最優秀登山家が登攀したルートをフリークライミングで登攀することで成長していった。ボルト、ロープ、穴を一切使わなかった。彼は、他のクライマーのルートを制覇した後、他のルートも開拓した。「何本のルートを制覇したのかは、自分でもわかりません」と彼は言う。

フリークライミングの世界では「魔術師」とあだ名されているマノーロにとって、彼の山や岩壁との関係がグレードの追求につきると考えるのは間違いだ。彼が話すのを聞くだけで、作家のブッザーティが真の山岳登山家に見出した、自己の追求、自己の真実との深い関係、自分と対決する自



然への思いやりが、マノーロにも備わっていることに改めて驚かされる。ビレイをしないで小さくし、心理的なプロテクションのバランスをしないで減らすことで、彼は技術的に進化していった。こうして、物理的な面だけでなく、心理的な面でも強くなることが要求される、全面的なクライミングを強調したのだった。

マノーロのクライミングへの情熱は、哲学的、ロマンチックな、個人的なものだ。スポーツ大会に参加することをこれまで望んだことはない。「試合には興味がありません。私にとって、フリークライミングはひとつの、私だけの方法で山を経験するためのものです。そして、何らかの形で私の生計を立てることを可能にしてくれました。」とマノーロは語る。これは、マノーロにとってかけがえのない自然の環境なのだ。「山はゆっくりとした時間が流れる場所です。私が好きでない町や大急ぎで駆け回る世界とは全く違います。」とマノーロは言う。こんな理由から、彼は、30年以来、サン・マルティーノ山脈裾野のピリミエーロ峡谷にあるトランザックワという町に住んでいる。

最近、54歳を迎えた。誕生日は、ドロミーティの中でも難度の高いルートに登ることで祝った。若くはない今、彼は再び挑戦を始めた。しかし、彼は今、昔よりも辛

抱強くなり、休憩の時間を長く取るようになった。彼が開拓し、多くはまだ他のクライマーにとっては未到達のルートで、彼はフリークライミングを続ける。「あの岩に手を置くことは、いつも深い感動ですよ」。これは自分の情熱を信じ続けた者の言葉だ。

GianAngelo Pistoia
ジャンアンジェロ・ピストイア

Concept & design: GianAngelo Pistoia
Photos: Cristina Zorzi - Walter Bellotto

COMeVA?
バックナンバーセール
COMEVAではバックナンバーをご希望の方にお分けしています。

1部送付料金	
イタリア	2.20ユーロ
ヨーロッパ	3.00ユーロ
日本	400円
50部送付料金	
イタリア	50ユーロ
ヨーロッパ	65ユーロ
日本	10000円

お問い合わせは jun.milano@nipponclub.it
tel/ fax 02-55015009へ

